引き継がれるDNA

大胆に柔軟に変化に対応

矢島八郎、小島弥平、井上保三郎、山田昌吉、桜井伊兵衛…。高崎の近代化、発展を地元で引っ張ってきたリーダーや経済人たち。共通するのは時代の変化に大胆、機敏に対応するしなやかさと、郷土への深い思いだった。そのDNAは市内の企業にさまざまな形で引き継がれ、新たな時代を築こうとしている。

最先端行く伝統産業

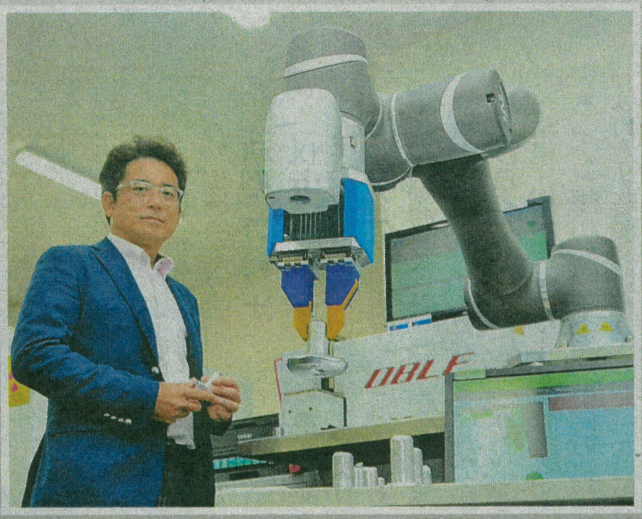
鋳物の内外

パソコンや計測器などの精密機器が並ぶ白壁の部屋。腕型ロボットが静かに部品をつかんで分析器に載せた。「腕」は先端のカメラで各種機器の作動状況を確認しながらキーボードを操作し、センサーの掃除もする。

大手ロボットメーカーの開発室？ではない。鋳物製造の内外（高崎市上豊岡町、小沢淳社長）の工場の一室だ。

鋳物は溶かした金属を型に流し込み成型する伝統的な産業だが、鋳物工場が舞台となった若き吉永小百合さん主演の映画「キューポラ（溶解炉）のある街」をイメージしたら大間違い。内外の工場は至るところで品質管理のためのセンサーやIOT（モノのインターネット）が稼働し、熟練の職人に匹敵するかそれ以上の仕事をこなしている。

そうして生み出す「圧倒的な品質」（小沢社長）は複数の国内自動車メーカーの目に留まり、次世代製品の受注につながっている。近く自社開発のAIを使った品質判定の仕組みも動きだす。



内外の鋳物工場の一室で終日稼働するロボット。小沢社長とスタッフがカスタマイズしている

半導体から農福連携まで

成電工業

内外のように持続可能性にもこだわった事業展開をしている企業が高崎で増えている。半導体や制御盤製造の成電工業（同、瀧沢啓社長）。コロナを経てより強化しようとしているのは野菜工場の経営とプラントの製造販売だ。

同社の主力は半導体と制御盤製造だが、リーマンショックで売り上げが落ち込んだのを機に、発電設備やLED照明機器の製造などのエネルギー事業に踏み出した。さらにLEDとの親和性から2009年に事業化に乗り出したのが野菜の水耕栽培装置の開発だった。

当初、家庭や店舗向けを目指したがメンテナンスが課題となり伸び悩んだ。ところが思わぬところから注文が舞い込む。障がい者福祉施設。利用者が栽培することで就労支援になるというのが理由だった。これまで全国18カ所の施設に装置を納入。15年からはNPOを立ち上げ、障がい者を雇用し、多様なレタスを生産販売している。

水耕栽培のため、透析患者向けの低カリウム野菜など、成分を調整した商品を作れるのが強み。現在、29人が交代で月産6500株を栽培、スーパー25店に納品している。

旧電子部品工場をリノベーションして作った野菜工場内の一室に、障がいを持ったスタッフたちの笑い声が響く。ここでは半日は仕事、半日はレクリエーションと決められている。「あとは自分たちがいなくなった時のことだけ」。楽しそうな我が子に、親たちが目を細める。

「グループホームを作ろう」。瀧沢社長はそう考えている。

野菜栽培装置で生産されるレタス。養分調整で透析患者でも食べられる商品を生み出せる